

週刊 **夢の窓** No.16



むうにい

テレポート・アイテムを拾う

角のゴミ収集場所に、携帯端末のようなものが捨てられている。拾ってよく眺めてみると、ディスプレイに赤と青のボタンだけが表示されているのだった。

「なんだろう。アプリなのかな」

試しに、赤いボタンを押してみる。液晶に数字の羅列が現れる。ぎっしりと並んでいるので読みづらい。

歩きながら、今度は青いボタンを押した。すると、さっき拾った場所へ、一瞬にして引き戻される。

「えっ?!」まるで、ビデオの巻き戻しのようだった。

数歩下がって、もう1度青ボタンを押す。再び、同じ場所へと瞬間移動する。

「これって、テレポート・アイテムじゃないかっ」わたしの胸は、一気に高まった。すごいものを拾った。

それにしても、なぜこの場所にばかり移動してしまうのだろうか。このアイテムが送信機だとしたら、どこかその辺に受信機が設置されているのかな。

赤いボタンを押してみる。表示されている数字が書き換わった。相変わらず、何を意味しているのかさっぱりわからない。

10メートルばかり離れて、青いボタンを押してみた。ゴミ収集場所の前まで飛んできたが、さっきとはちょっとだけ位置がずれている。

「ははあ、そういうことか！」わたしは気がついた。

赤いボタンは、現在立っている場所を記録するものに違いない。表示されている数字は座標なのだ。

どこか、手頃な実験場所はないか、とあたりを見回す。

数軒先に、5階建ての古いビルがあった。わたしは中へと入り、屋上までの階段を駆け登る。

「ここで赤を押すよね」数字が瞬時にして変わる。「降りて行って、今度は青を押すとするよ」

わたしは下まで行って、ボタンを押した。

パッと屋上に戻ってきている。

「すごいっ。こんないいもの拾っちゃって、今日はラッキーだぞ。それにしても、前の持ち主は、なんだったって捨てたりしたんだろう？」

道々、どう使いこなしてやろうか、などと考え事をして歩いていたため、ぽっかりと開いた穴に気づかず落ちてしまった。

「わっ、わあーっ！」

幸い、尻もちをついただけで済んだけれど、けっこうな高さのため、這い上がるのは不可能だ

でも、今のわたしにはこのレポート・アイテムがある。最後に座標を設定したのは、たしかコンビニの前だった。

慌てず騒がず、わたしは青ボタンをポチッと押す。

ところが、何も起こらない。

「あれ……」

何度押しも、瞬間移動どころか、微動だにしなかった。

「まさか、圏外なの？」液晶に電波状況を示すアイコンなどない。そういう問題ではないようだ。

座り込んで、じっと考える。

コンビニ前は、どんな様子だったっけ？ そうだ、往来なので、かなり混雑していた。

「つまり、転送先に人が立ったままなんだ。障害になって、レポートできないのか」

たぶん、携帯で長話でもしているのだろう。誰だか知らないが、本当に迷惑だ。

ほかに方法はないかと、逆さまにしたり裏返したりしているうち、ボールペンの先ほどのボタンを見つけた。

「リセット・ボタンかも。工場設定値に戻せば、もしかしたら地上に出られるかもしれない」

わたしは、爪の先でリセット・ボタンを突いた。

数字がザッと流れる。0にはなっていないので、どこかへレポートできるはずだ。

ちょっとだけためらった後、青ボタンを押す。

ゴミの収集場所の前だった。

「こういうのって、あんまり頼りすぎると危険なのかもしれないな」

考えた末、わたしはそのアイテムを元の場所へと投げ捨てた。

町の公会堂で、「自分とは何か」をテーマにした講義が開かれていた。この深遠な議題は思いのほか人気を呼び、席はほぼ満席に近い。

「えー、コホン。つまり、なんと申しますか、あれです。『自分』というものは、この世にもあの世にも、ただ1つと申しますか、ほかには存在しないと言うべきか、何しろ不思議なものでして」

「自分学」の権威と称する、どこぞの大学の教授がそう述べ始めた。話がよほど退屈と見え、かしこまって座っていた町民たちも、次第に姿勢が崩れてきて、そのうちあくびまで出る始末。

「そもそも、『自分』とは何か？ ずばり、それは己自身という解に立ち戻るわけでありまして、それすなわち、無数に広がった枝葉の、たった1点に焦点が当たった様を思い浮かべてもらえばわかるのですが、要するに実はそのようなものなど、本当は存在しないという結論に至るわけなのです」

教授が熱弁を振るうほど、わたし達には強烈な催眠効果となって襲いかかる。

誘惑に打ち勝てず、夢の国へと連れ去られ、気持ちよさそうな寢息を立てる者も少なくなかった。

隅の席で、ひそひそとささやき声がする。

「この公会堂は、建ってからもう、50年になるんだよな」

「聞いた話では、建設中に作業者が7名、事故で亡くなったそうだ」

「それだけじゃないぞ。ここで式を挙げるはずだった花嫁が、来る途中に交通事故に巻き込まれてな。這うようにしてたどり着いたが、その直後に息を引き取ったんだって」

「ここの職員の1人がさ、横領の疑いをかけられ、それを苦に自殺したって」

「そう言えば、以前から、ここには『出る』って言うしな」

「出るって、何がだい？」

「そりゃあ、決まってるさ。なあ？」

「ああ。幽霊だよ、幽霊」

初め、わたしはほとんど気にしなかった。古い建物にまつわる言い伝えなど、どこにでもある。珍しくもなかった。

けれど、私語はさざ波のように広がっていき、静まる気配がない。誰かが口を開くたび、無気味な噂話がまた1つ、語られていくのだった。

「深夜、公会堂の前をクルマで通ったら、赤いドレスを着た若い女性が立っていたんだ。こんな時間に何だろうと、クルマを止めて振り返ったら、頭から血を流してるじゃないか。服はその染みだったんだ」

「この2階に談話室があるだろ？ 204室だけ、今も開かずの間になってるんだ。変だろ？ 職員は誰も訳を教えちゃくれない」

「その部屋の話は聞いたことがある。なんでも、異空間に通じているそうだけ」

「地下のボイラー室は、身元不明者の遺体を焼却するのに使っているらしい」

ここまで話が集まっている場所もほかにはあるまい。たとえ噂だとしても、ただ事ではなかった。

突如として、会場がしーんと静まり返る。

「天使が通った――」どこかの席で、そうつぶやく声がした。

偶然にも、居合わせた全員の話が途切れた瞬間だ。教授までもが、一息ついて、コップの水を口につけたところだった。

わたしは説明のつかない薄気味悪さを覚えた。さっきまでの怪談が懐かしく思えたほどだ。

「……ねえ、窓のところ」1人が、震える声で言う。「あれ、いったい何なのかしらね」

全員が一斉に窓を見た。

急に冷房が効いたかのように、空気が張り詰める。

わたしは、もう少しで叫び声を上げるところだった。

根はいい奴の家へ遊びに行く

友人の木田仁は、お人好しだけれど、時々、妙なマイ・ブームに熱中しだすので困ってしまう。

他人の趣味に口出しするつもりはないが、周りの者を巻き込むので迷惑をこうむるのだ。

川口駅前の公園の「三連ピラミッド」の前で待っていると、木田が姿を現す。

「やあ、むうにい。こんなところに呼び出しちゃって悪かったね」

「別にいいけど……。今日はどこに行こうっていうの？」わたしは聞いた。

「うん、おいらさ、今、風変わりな人間を友達にするのが面白くてさあ」

「へ、へえー」もしかしたら、わたしの事もそんなふうには括られているのだろうか。

「でね、この間知り合った人物を、君にも会わせようと思って」

「変な人じゃないよね？」わたしは身構えた。

「いや、だから、変な人なんだってば。それが面白いんじゃないか」

やだなあ。そもそも、わたしは人見知りをするたちだし。

「大丈夫、大丈夫。ここからすぐそこだから、その人のお宅」と木田。

「そういうことじゃなくって、あのね――。えっ、この近くなのっ?!」わたしは驚いた。だから、川口駅なんかで待ち合わせをしたのか。

これじゃ、今さら「いやです」なんて言えやしない。

「行こっか」木田はわたしの肩をぽん、と叩いて促す。

「うん……」わたしは後について歩きだすよりなかった。

駅から10分、20階建てマンションのその足元に、コバンザメのように貼り付いた掘っ立て小屋。

「ここっ、ここだよ、むうにい」木田が指差す。

呼び鈴を押すと、中からドスドスと足音が聞こえてきた。引き戸がガラッと乱暴に開き、30をちょっと過ぎた辺りの痩せた男が現れる。

「おうっ、木田君か。そっちのお連れさんは友達だな？ ささ、上がとくれ」

お邪魔します、と断ってわたし達は玄関をくぐった。中はきれいに片付いていたが、息が詰まるというほどではない。それなりに生活感が滲んでいた。

正面から見た時は、よくある木造平屋だと思ったが、間取りはばかに長細い。玄関、台所、浴室、寝室と、串団子のように一直線なのだ。

これではまるで「ウナギの寝床」である。そして、実際、入り口から窓まで、帯のように長い水槽が置かれ、黒光りしたパイプそっくりなウナギが寝そべっているのだった。

一番奥の部屋に通され、モカ色のソファに掛けるよう勧められた。

「まあ、麦茶でもどうぞ」

冷たい麦茶を飲みながら、木田がまず口を開く。

「伊能さん、こちらがおいらの古くからの友人で、むうにいです。むうにい、こちら伊能さんだよ」

「初めまして」わたしはべこりと挨拶をした。

「おう、よろしくな、むうにいさんよ」伊能も丁寧に頭を下げる。

それにしても、特徴のない人物だ。七三に分けた髪に面長の顔、目も耳も2つずつで、鼻と口はそれぞれ1つ。どこにでもいそうな男だった。

誰かに紹介しようとしても、あまりにも特徴がないので悩んでしまう。

つけっぱなしのテレビは、ニュースを流していた。

「消費税増税は断固として行います。わたしの政治生命に懸けてっ！」そう、総理が熱弁を振っている。

「なんだと、ドジョウの分際でっ！」いきなり、伊能が立ち上がって叫ぶ。

木田もわたしもびっくりして、ただ見上げるばかりだ。

「まあまあ、落ち着いて下さいよ。とりあえず、座ったらどうです」木田がなだめる。

「まあ、座ってやらんでもない」そうぶつくさぶちながら、渋々と腰を下ろすのだった。

「続いて、天気予報を――」

テーブルを勢いよく叩いて立つ伊能。

「当たり前しない天気予報など、やめちまえっ！」そう怒鳴ると、押し入れをパンッと開ける。

布団の代わりに、古今東西の様々な武具鎧が詰め込まれていた。

伊能は中世の鉄鎧を引っ張り出すと、ちゃっちゃと装備し始める。

「どうするつもりだろう？」わたしは木田に耳うちをした。木田も、さあと首を傾げる。

両手でブロード・ソードを構え、伊能は37型液晶テレビの前に立った。

「神のご加護をっ！」そう一声発し、剣を振り下ろす。テレビは真っ二つに叩き割られた。

「あーあ、やっちゃった。結構、高いのに」わたしは木田に言った。

「まあ、彼のテレビだからね、壊そうがどうしようが勝手だけどさ」木田はそう答える。

伊能は、鉄兜を脱ぎ捨て、玉の汗を手の甲で拭った。

「ふう、いい気味だ。天皇バンザイっ！」

「ねえ、木田」わたしは伊能に聞こえないよう、ひそひそと言う。「あの人、相当に短気で危ないよね」

「でもね、根はいい奴なんだよ」

木田のお人好しにも呆れてしまう。

巨人がそっとやって来る

東京スカイツリーに登ろうと、押上までやって来た。友人の中谷美枝子は、興奮しきっていて、手がつけられないほどだった。

「スカイツリーよ、スカイツリーっ！ あたし、登るの初めてなんだよね。高さ何メートルだったっけ？ えっ、634メートルもあるの？！すごい、すごい、すごい！ そこまでさ、一気にエレベーターで上がるんだよね、わくわくする！」

わたしだって、まだ一度も登ったことがない。それに、エレベーターで行けるのは450メートルまで。634メートルなんて、作った人だって、たぶん、立ったことはないと思う。

ところが、いざ着いてみると、「本日の入場は定数に達したため、締め切っております」と立て看板が。

「えーっ、そんな、うそ、うそ、うそっ……」中谷は取り乱さんばかりに嘆く。期待が大きかっただけに、落胆ぶりも尋常じゃない。

正直、わたしはホッとしていた。煙じゃあるまいし、高いところは苦手なのだ。

けれど、今そんなそぶりを見せたら、大騒ぎに発展しそうなので、演技でもここはがっかりした顔をする。

「仕方ないよ、まだ、できたばかりなんだし。そのうち、閑古鳥が鳴き始めるから、また来ようよ」

「閑古鳥が鳴くスカイツリーなんて、見たくないけど。でも、あきらめるよりないよね。あーあ、くたびれ儲けかよ。来て、損しちゃったな」

あんまり気の毒なので、

「なら、東京タワーでも行って見ない？ あっちなら、きっと登れるよ」と代案を出してみた。

中谷はぱっと明るくなる。

「そっか、それいいかも。あたし、東京タワーってまだ登ってないんだよね。あんた、登ったことある？」

恥ずかしながら、わたしもなかった。

「それが、まだなくて」

「決まりだね。行こっか、東京タワー。レッツ・ゴーッ！」

変わり身の速さも、さすがである。

東京タワーの展望台から見下ろす都会の風景は、それこそミニチュア模型のようだった。建物の中で、今この時も、人々が生活している、という事実を、なんだか信じられずにいる。

「これって、下から300メートル位あるんだよね？ ああ、なんだか、目まいがしてきちゃう。だけど、それがクセになりそうっ」

「何言ってるの中谷。やっと120メートルなんだってば」わたしは言った。「いい？ スカイツリ

「なんて、この3倍以上もあるんだから」

さすがの中谷も、目を丸くする。「……すごっ。信じらんないー」

さっき上り損ねたスカイツリーを探していると、ずっと向こうの方から何かやって来るのが見えた。

「ねえ、あれ何だと思う？」わたしは指差す。

「ん？ あー、あれね。あたしには人に見える」

「それにしちゃ、大きくない？ だって、ほら。高層ビルの屋上に手をつけて歩いてるじゃん」

「あ、ほんとだ。じゃあ、きっと巨人じゃないの？ だって、ほかに考えられないし」

巨人は、うつむきながら、慎重に足を運んでいる。人やクルマを踏み潰さないよう、用心して歩いているらしかった。

「あの巨人、腰巻き1枚しか身に付けてないけど、冬は寒いんじゃない？」中谷が指摘する。

「冬は上着をはおると思うけど」わたしは考えながら言った。

「ねえ、こっちに向かってない？ 東京タワーを襲う気だったりして」と中谷。「あ、ちょっとだけ、ダルビッシュに似てる」

巨人は確かに近づいていた。そおっと歩いてはいるが、何しろあの巨体だ。足が地面に着くたびに、タワーがズシッと揺れる。

展望デッキにいるほかの客も巨人に気がつき、慌てる者、座り込む者、祈りだす者、それぞれに成り行きを見守っていた。

巨人はついに東京タワーへとたどり着く。屈んで、わたし達のいるこの窓を覗き込み、「や、どもども」とにこやかに挨拶をした。

礼儀を知らないと思われるのもしゃくなので、こちらもみんなして、おじぎを返す。

「今日はね、東京タワー見物に来たんだ」巨人が言う。ぷるぷる震えているので見下ろしてみると、足の置き場に苦心して、爪先立っているのだった。「でね、頼みがあるんだけど、誰か聞いてもらえないかなあ」

「どんな頼みですか？」首からデジイチをぶら下げた初老の紳士が名乗り出る。

「東京タワーとツー・ショットで写真を撮ってもらえたら、嬉しいんだけど」

「おあいご用です。この向かいのビルから撮るとしましょう」そう言うと、紳士は展望台を降りていった。

巨人はビルの方を向き、東京タワーに軽く手を添えてポーズを取る。

ビルの上の方の窓で、何回かフラッシュの閃光が見えた。

「ありがとう、いい記念になったよ」巨人はビルに一礼し、さらにわたし達にも手を振ると、元来た方へと去っていった。そろーり、そろりーり、町を壊さないように。

「それにしたって、何で東京タワーだったのかしらね」中谷が首を傾げる。

「東京スカイツリーは、混んでたからじゃないのかなあ」

わたしはそう答えた。

U F O 襲来っ！

寢室の窓越しに強烈な光が射し込んできて、目が醒めた。

「こんな時間に、外でフラッシュなんか焚いてるのは誰だろう」わたしは寝ぼけまなこでカーテンを開ける。

目の前の空き地に、タンク・ローリーくらいの丸っこい乗り物が駐車していた。デコトラも顔負けの、キラキラど派手な電飾を瞬かせている。

「あんなに明かりを付けちゃって。ただでさえ、省エネだって騒いでいる、このご時世に、いったい何を考えてるんだか」

まぶしさに目を細め、様子を見てみると、中から人影が3つ、4つ降りてきた。

窓のすぐそばまでやって来ると、全員そろって、平手で喉仏をとんとんと叩きながら言う。

「ワ・レ・ワ・レ・ハ、ウ・チュ・ウ・ジ・ン・ダ」

宇宙人だっ！　ということは、あの乗り物は宇宙船なのかつ。

「ち、地球を侵略しに来たんだねっ?!」わたしはうわずった声で叫んだ。

宇宙人達はきょとん、と首を傾げる。別の1人が、i P a d そっくりの端末で何か操作して、わたしに表示画面を見せた。

〔はぁ?!　なにそれ。つまないっ!〕

日本語でそう書かれている。

「えっ、違うの?」わたしは拍子抜けしてしまった。

〔我々は、惑星・リーバイスから来た、宇宙文化生命学の研究者です〕

「ああ、調査団の方達ですか」わたしはうなずいた。「つかぬ事をお伺いしますが、わりとちょくちょく地球上空を飛び回ったりしてませんか?　最近、目撃情報が多いんですが」

〔ははは、そうかもしれませんね。なんせ、上期の締めが近いもんで、それまでにはレポートを提出しなければならないんですよ〕

「どこも、大変なんですね」心から同情する。

〔ところで、今日は君にご協力を願いたいんですが〕宇宙人が改まって言う。

「はい、何でしょう?」

〔人体実験の被験者になってもらえないでしょうか〕

「それはちょっと……」わたしは困った。

〔あ、いや。何も、切ったり改造したりと言うんじゃないんです。昔はやっていましたが、近頃では宇宙人権協会がやかましくて〕

「そうなんですか。どういうことをすればいいんです？」

[ここじゃなんですので、どうぞ、あちらへ――]

そう言うと、U F Oの方を指し示す。

「お邪魔します」わたしは彼らについていった。

U F Oの中は、ゆったりとした応接間になっている。革張りのソファがドーナツ状に作られ、中央には丸いテーブルが置かれていた。

「なかなか居心地のよさそうな船内ですね」わたしは感心する。

[夜は、テーブルを端に寄せて、布団を敷いて寝るんです]

「へえー」どこか、所帯じみているなあ。

[料理が運ばれてきました。さあ、召し上がってみてください]

テーブルの上に、次々と食べ物が載せられていく。冷や奴、納豆、ハンバーグ、すき焼き、スクランブル・エッグ……。

「てっきり、エイリアン料理が出てくると思いましたけど」

[今、銀河系じゃ、地球のメニューが流行なんですよ。スシなども大人気で、アンドロメダ・ロールだとか、宇宙軍艦巻きなど、独自の物まで作られていますね]

促されて、わたしは料理に箸をつけ始めた。

冷や奴を箸で挟んで切り分け、そっと口に運ぶ。

[おお、ああして小さくし、強すぎず、弱すぎず、計算しつつして持ち上げるのか] 宇宙人達は、身を乗り出すようにしてわたしを観察する。

パスタをフォークにクルクルッと巻きつけると、

[地球からの電波で観たことがあるが、本当にああして摂取するんだなあ！]などと、大いに湧くのだった。

「あのう、いちいち評価されると、とっても食べづらいんですけど」わたしが苦言を呈すると、
[ああ、すみません。ですが、これが人体実験なんですよ。年末に「地球グルメ」という本を出版する予定でして]

「ああ、そういうことでしたか」わたしはようやく理解した。「えー、納豆は、こうしてつまみます。つるんつと滑りやすいので大変ですが、力加減と勘で、えいやっ、おととと、そらっ！」

[なるほどっ！ 我々は、わざわざ専用のコンピューターまで開発して研究に当たったんですが、結局、実現できずにいました。……えっと、「力加減と勘」……っと]

すっかり満腹になったわたしは、宇宙人達にいとまを告げてU F Oを後にした。

帰る間際、

「2冊目の刊行が決まったら、また呼んで下さい。今度は、ステーキとかフグ鍋なんかいいと思

いますよ」

岩戸のお宿

深い森を貫くようにして伸びる一本道、わたしは祖母に手を引かれている。

「むうにいや、夜道が怖くはないかい？」祖母は時々振り返ると、優しく声をかけてきた。

「ううん、ぜんぜん。だって、おばあちゃんといっしょだから」祖母の温かな手を、わたしはしっかりと握り返す。

「そうかい、そうかい。もうじき着くからね」

森の出口には、天まで届くような2本のスギの木が構えていた。わたしたちはその間を通過して、岩山へと出る。

「この岩戸はちいっとばかり狭くてな」祖母は、岩山にぽっかりと空いた暗い穴の前にしゃがみ込んだ。「ここからは手をつないだままではよう歩けないから、後からついてくるんだよ。途中、枝道がいくつもあるけど、ばあちゃんとはぐれないようにな。慌てず、ゆっくり行けば心配ないから」

「迷子になったら、ちゃんと待っていてくれる？」少しだけ不安になって、そう聞く。

「ああ、きっと待ってるから。だから、安心して歩いておいで」

わたしは、ようやく祖母の手を離した。

祖母が岩の裂け目に潜った後も、しばらくの間、立ち止まって覗き込んでいた。真っ暗で、差し出した自分の手さえも見えない。

奥から、「むうにいや、さ、入っておいで」とくぐもった声が聞こえる。わたしは、身を低くしてにじり入っていった。

ぞくっとするほどの冷気が体中に染みしてくる。触れる周囲の岩肌は、まるで絹のように滑らかだ。つるつるとして、慎重に足を運ばなければ、たちまち転んでしまいそう。

「おばあちゃん、どこ？」わたしは呼んでみた。

「ここにいるよ」ほとんどすぐ前から返ってくる。

「足が滑りそう……」わたしが言うと、

「なあに。転ぶまいぞ、そう心に念ずれば、決して滑ったりしないもんだよ」

わたしは心のなかで、「転ばない、転ばない」と強く祈った。

不思議なことに、おぼつかなかった足元がしゃんとする。

先に行く祖母のかすかな足音を頼りに、奥へ奥へと進んでいく。

「ここは三叉になってるから、気をつけるんだぞ」祖母が注意を促す。「真っ直ぐな、真っ直ぐ。曲がったりしないように」

「うん……」わたしは、左右の岩をなでながら歩いた。祖母の言う通り、洞窟は3方向に口を開けている。

わたしは真ん中の道を手で探り、進んだ。

「こっちでいいんだよね？」

「そうそう。そのまま、ついておいで」祖母の声に、わたしはほっと息をつく。

ほのかに光が差ししてきた。目を凝らせば、前に行く祖母の姿が闇夜のカラスほどに感じられる。

「もうすぐ、出口だからね」祖母が言った。

だんだんと明るくなり、わたし達は窮屈な岩の通路を抜ける。苔むした石畳の広場だった。空は薄桃色に輝き、辺りを照らしている。朝でもない、昼でもない。さりとて、夕暮れとも違う、調和の取れた明るさだ。

木の温もりも柔らかな門が立ち、格子戸がはめ込まれている。

祖母はからからっと戸を引いた。ずっと奥まで、板敷きの廊下が続いている。

わたし達は、上がりかまちに腰掛けて靴を脱ぎ、並んで廊下を歩いていった。

廊下には部屋が等間隔で並んでいて、それぞれ戸の上には部屋の名を書いた木札が掛かっている。

「ばあちゃんの思い出の間」という部屋の前で、祖母は足を止めた。

「はあ、やっと着いた。ここが、今日からばあちゃんの部屋だよ」祖母は安らかな笑顔を浮かべてそう言う。

「一緒に住んでもいい？」わたしが聞くと祖母は首を横に振った。

「むうにいや。ここには、ばあちゃんしか入れないんだよ。お前はそのままお帰り」

わたしはびっくりしてしまい、今にも泣きだしたい気分になった。

「だって、せっかくここまで一緒に来たのに。何で？」

祖母はわたしの頬を両手で包み込む。皺だらけでかさついてはいたけれど、とても暖かった。

「この場所を、お前に知っておいて欲しくてね」祖母は言う。「ばあちゃんは、この部屋からいつまでもお前のことを想い続けているよ。だからね、むうにいや。お前も、ほんのたまにいい、ばあちゃんのことを思い出してくれな」

わたしは黙ったまま頷いた。声に出すと、涙がこぼれてきそうだったから。

禁断の歌

町内会で、会長が「どうしたら、町をもっと活性化できるのか」と熱心に語っているさなか、わたしはずっとイルカのことばかり考えていた。

大海原を優雅に泳ぎまわるイルカ達。うるさい規則に縛られもせず、自由気ままに暮らせるなんて、ほんとうにうらやましい……。

「それじゃ、むうにいさんの意見を聞かせていただきます」会長がわたしを指名する。

「あ、はいっ」慌てて立ち上がったものの、何を話せばいいのかさっぱりわからない。

まごまごしていると、隣に座っているパン屋の奥さんが助け船を出してくれた。

「来週開かれる町内祭りのイベントで、飛び込み参加歓迎の何かをしようって話し合ってるの。むうにいちゃん、アイデアとかないかしらねえ」

わたしはうーん、と天井を仰ぐ。

「ありきたりかもしれませんが、カラオケなんてどうでしょう」

あちこちでうなずき合う。みんなが納得している様子を見て、会長も賛成した。

「そうですね、それはいいかもしれません。さっそく、カラオケ・セットの準備をすることにしましょう」

おざなりの拍手を合図に、閉会する。

町内祭り当日、カラオケ大会の部では、提案者ということで、わたしが司会を務めることになった。

「それでは、お待ちかねのカラオケ大会を始めたいと思います。司会はわたし、むうにいが進行させていただきます。なにとぞ、よろしく願います……では、エントリーナンバー1、田島ハルさん、マイクの前へどうぞっ！」

小学校の前で長年文具店を営むこの人は、今年で87歳になる。わたしも、この文具店にはずいぶんとお世話になったものだ。

当時ですら、「文具店のおばあちゃん」などと呼ばれていたけれど。

「はい～、わしゃ、『リンゴ追分』を歌いますよ」田島さんは一呼吸すると、歳とは思えない声量で気持ちよく張り上げる。

歌い終わると同時に、わたしは鐘をキンコンカンコン、と惜しげもなく鳴らした。

「素晴らしかったですよ、おばあちゃん。いやあ、美空ひばりご本人かとびっくりしました」

田島ハルさんは、満面の笑顔で観客席へと帰っていく。

「続いては、この方」そう言ってわたしが紹介したのは、町外れの1軒屋に住む、大河原権三郎さんだった。彼は30年前妻に先立たれ、以来、息子の「うちに来て、一緒に住まないか」の言葉にも耳を貸さず、頑なに独り暮らしを守っている。

「わしは辛気くさい歌は嫌いじゃ」そう言い放つと、備えつけのマイクをやにわに取り上げ、「サザエさん」のテーマ・ソングを歌いだした。

瞬時にして会場がざわめく。

「じじい、そんな歌なんかやめちまえっ！」「ふざけるなっ、もう月曜日の朝を思い出しちまったじゃねえか！」

一斉にヤジが飛ぶ。わたしはどうしたらいいかわからず、ただ、おろおろするばかりだった。大河原さんは、そんなことなど気にもせず、2番に入ろうとしている。

警備員が数人、舞台を駆け上り、大河原さんを四方から押さえつけた。

「こらこら、その歌はやめなさいと言ってるでしょうがっ」

「な、なにををするお前らっ。返せ、わしのマイクを返すんじゃ！ まだ歌は終わっちゃいないぞっ！」

抵抗空しく、大河原権三郎さんは社務所へと引っ張られていく。

呆然と見守っていたわたしは、ふと我に返った。大慌てで、チューブラーベルの前に立つ。カーンと一発、申しわけ程度に鐘を鳴らした。

週刊 夢の窓 No.16

<http://p.booklog.jp/book/88620>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88620>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88620>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ